

歴史を証言する ジャーナリストとして

矢高則夫 (高25回)

最後の「特派員世代」

1989年12月下旬のある夜、私は中東の大国イランの首都テヘランにあるメヘラバード空港に降り立った。その日から91年4月まで共同通信社のテヘラン特派員(支局長)を務めた。若い世代にはなじみはないだろうが、かつて海外駐在記者は「特派員」と呼ばれていた。公共放送には「NHK特派員報告」という番組もあった。辞書には「外国に特別に派遣されて、ニュースの取材報道に当たる、報道機関の記者」(大辞林)とある。日本の経済的地位が上がると、海外旅行、在外勤務は身近なものとなり、91年夏、共同通信は特派員呼称を使わなくなった。私は最後の特派員世代に属していたことになる。

イランでは5万人の死者を出した大地震(90年6月)やイラクによるクウェート侵攻(同年8月)とそれに続く都市ヨハネスブルクに1993年3月下旬に赴任した。ネルソン・マンデラ氏と初めて会ったのはその直後だった。金、ダイヤモンドなど鉱物資源を支配する南ア財界首脳との会合に現れたマンデラ氏を取材したが、握手した手の柔らかさと臆せず肩に力を入らない態度が印象的だった。当時の人口約4千万人のうち約8割を占める黒人は政治に一切参加できなかった。白人政権は、黒人を部族別に分断し農業に適さない狭い土地に押し込める一方で、鉱山の採掘権を事実上独占していた。

マンデラ氏は18年、インド洋に面した現在の東ケープ州で生まれた。現与党であるアフリカ民族会議(ANC)の武装闘争を指導。反逆罪で終身刑となり27年間を獄中で過ごすうちに武装闘争の限界を悟り、平和的政権交代を決意し同志を説得した。

「あなたがたの銃、ナイフを海に投げ捨てなさい」。釈放直後に黒人に対して白人への報復をしないよう訴えた演説は南ア政治の転換点となった。

94年5月に初の全人種選挙が行われ、ANCは大勝した。マンデラ氏が初の黒人大統領に就任し、350年間支配者の立場にあった少数派白人の政権が倒れた。



遊説中のマンデラ氏
(筆者撮影)



●やたかのりお
1954年飯田市馬場町生まれ。東京大学教養学部卒業。共同通信社でイラン、南アフリカ、ニューヨーク等勤務。論説副委員長を経て国際情報室編集委員。東京都在住。現在、長野県の高専学校スーパードバイザー。

湾岸危機、湾岸戦争を次々と取材することになった。共同通信に入社し新聞記者になった79年4月1日は、革命で王制が打破され、イスラム共和国建国が宣言された日だった。当時も今もイランは国際政治の焦点であり続ける。定年を迎えた後も、国際情勢についての論説執筆や海外論調の翻訳に携わってきた。社会に出た当日の出来事と自らの記者人生の深い関わりを日々感じている。

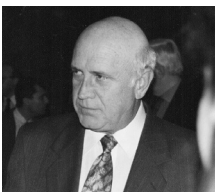
少子高齢化の進行、インターネットの発達の中でマスキの在り方は大きく変わったが、必要な情報を安価で迅速に伝える新聞の役割は今でも重要だ。多様な意見をバランス良く読者に届けるために励みたいと願っている。

マンデラ氏との出会い

悪名高い「アパルトヘイト」(人種隔離)から全人種参加の国家へ生まれ変わりを目指す南アフリカ。その最大

視線合わせぬふたり

白人政権時代のデクラーク大統領(当時)とは93年にノーベル平和賞を共同受賞した。民主化後はデクラーク氏とコンビを



マンデラ氏を釈放した
デクラーク氏(筆者撮影)

組み、自らの副大統領に迎えた。ところが、何度となく取材しているうちに両者が公式の場で視線を合わせることがないことに気づいた。個人に戻ればふたりは「ウマが合わない」が明白だった。

当然だろう、と今にして思う。マンデラ氏は「ANCが人種解放闘争をやって、アパルトヘイトを打破した」と言うが、マンデラ氏釈放を決めたデクラーク氏の言い分は違う。「私があなたを自由にしてあげた」と恩着せがましい。「白人自らが正しいことだと思って、民主化を選んだ。ANCに追い込まれたからではない。自由意思による決断だ」と言い続けた。

南アの民主化から四半世紀近くが経過。南アフリカが世界の人種融和をリードできたのは、肌合いの合わないふたりが、民主化は一緒にやるしかない——と行って行動したからだだった。

マンデラ氏は著書の中で、投票直前のテレビ討論で「あ

なたを頼りにしています」とデクラーク氏に呼び掛けたと回想している。マンデラ氏は大きな目標を達成するためには、愛憎を乗り越え「本当に嫌な奴」であっても協力しなくてはならないことを教えてくれた。

ジャーナリストの使命

1994年7月、ヨハネスブルクの公園でケビン・カーターという写真家が排ガス自殺した。33歳だった。ケビンは前年スーダン南部（現南スーダン）に乗り込み、飢餓に悩む村で1枚の写真を撮影した。食料配給センターの方向に向かっていた女兒が倒れ、肉食のハゲワシが背後に舞い降り、視線を向けた。この場面を捉えた衝撃の写真がニューヨーク・タイムズをはじめ世界中の新聞に載ると、「なぜ少女を助ける前にシャッターを押したのか」と写真家を非難する声が高まった。

ケビンの自殺は、ジャーナリズムの最高峰とされるピュリッツァー賞受賞決定から3カ月後だった。読者からの非難に苦しみ、良心の呵責に耐えかね死を選んだという説も流れた。私はケビンの遺書を手し、両親、同僚、元恋人らの話を聞いた。

印象に残ったのは「ケビンは写真を撮ることで、惨状をひとりでも多くの人に伝え、写真家の使命を果たした」

ラリーマン風の日本人が走ってきた。ビルの八十数階でハイジャック機が突っ込んだ位置の反対側で仕事をしていた。階段を地上まで駆け降りて助かったのだ。

「何が起きたんですか」。この男性が尋ねた。「テロです。史上最悪のテロです」。私は答えた。数十メートルと離れていない場所に飛行機が突入、奇跡的に助かった人物は、何が起こったかを初めて知って驚いていた。

私はといえば、煙とほこりで上空が全く見えない場所を取材をしたあと、商店の電話を借りて支局に連絡し状況を聞いた。「ビルは2棟とも倒れた」との返事に「本当ですか」と口走ったのを覚えている。あの日、テレビの衛星中継でビル崩落を目の当たりにした日本人は多いと思う。彼らはビルの真下にいた私よりも正確に事態をつかんでいたとの事実は衝撃だった。

変わる社会、変わらぬ使命

自分の記者人生を振り返って思うのは、通信手段の進歩で社会は大きく変わり、マスコミも大きな影響を受けたことだ。40年前にはインターネット、スマートフォンは考えることもできなかった。少子高齢化が進み、日本の新聞購読者は毎年少しずつ、しかし着実に

との父親の言葉だった。写真が世界に与えた影響は大きかった。国連が仲介に乗り出し、2005年に200万人の死者を出したスーダン内戦の和平協定が成立した。

「何が起きたんですか」

米ニューヨークに赴任したのは99年夏だった。東西冷戦に勝利した高揚感の中、ハイテク景気に沸く社会の繁栄はまぶしかったが、01年9月11日に自ら体験した中核同時テロの衝撃はあまりに大きかった。旅客機で双子超高層ビルに突入する例のない凶行の現場である世界貿易センター近くにたどり着いたものの、状況は全くわからず、記者としての力の限界を痛感した。

テロ当日は空が澄み渡り快適な秋晴れだった。いつもより早く郊外の駅から通勤電車に乗った私が、終点のグラランド・セントラル駅に着くと、血相を変えた人々が次々と乗り込んでくる。駅のテレビに黒煙を上げる高層ビルが映し出されており事態に気づいた。



地下鉄で現場に向かう。シテイホール駅から地上に出ると、髪の毛がほこりで真っ白くなったサ

減少している。日本新聞協会によると、新聞発行部数は1997年の5376万部をピークに減少を始め、2015年には4427万部と私が記者になった79年の4585万部をも下回った。新聞の購読をやめてもインターネットを見れば、無料のニュースサイトからスポーツ、芸能まで欲しい情報が手に入る。自分が共感できる立場の記事だけを読むことも可能だ。しかし、取材に基づくことなく、一方的な視点に立って事実を無視する「偽ニュース」が大きな問題となる例は米国では盛んに報告されている。

戦後の新制教育制度が発足した48年に文部省（当時）が著作した「民主主義」という名の教科書が出版された。そこには「民主主義は多数を重んずるが、いかなる多数の力をもつても、言論の自由を奪うということとは絶対に許されない」と「多数の横暴」への懸念が記されている。

ここに新聞の存在理由があると実感している。正確で公平なニュースを適切十分に提供する。バランスの良さ。多様な見方を提供して、投書欄や識者談話など幅広く意見を戦わせるための紙面の提供。大きな権力の不正、腐敗の監視。そうした新聞の使命は私が記者になったときから変わっていないと思う。